131号
2022年3月31日
ひらかた 文化財だより
KAWARABAN
発行
枚方市 観光にぎわい部 文化財課
〒573-8666
大阪府枚方市大垣内町２丁目１番20号
電 話：072(841)1411
ファクス：072(841)1278

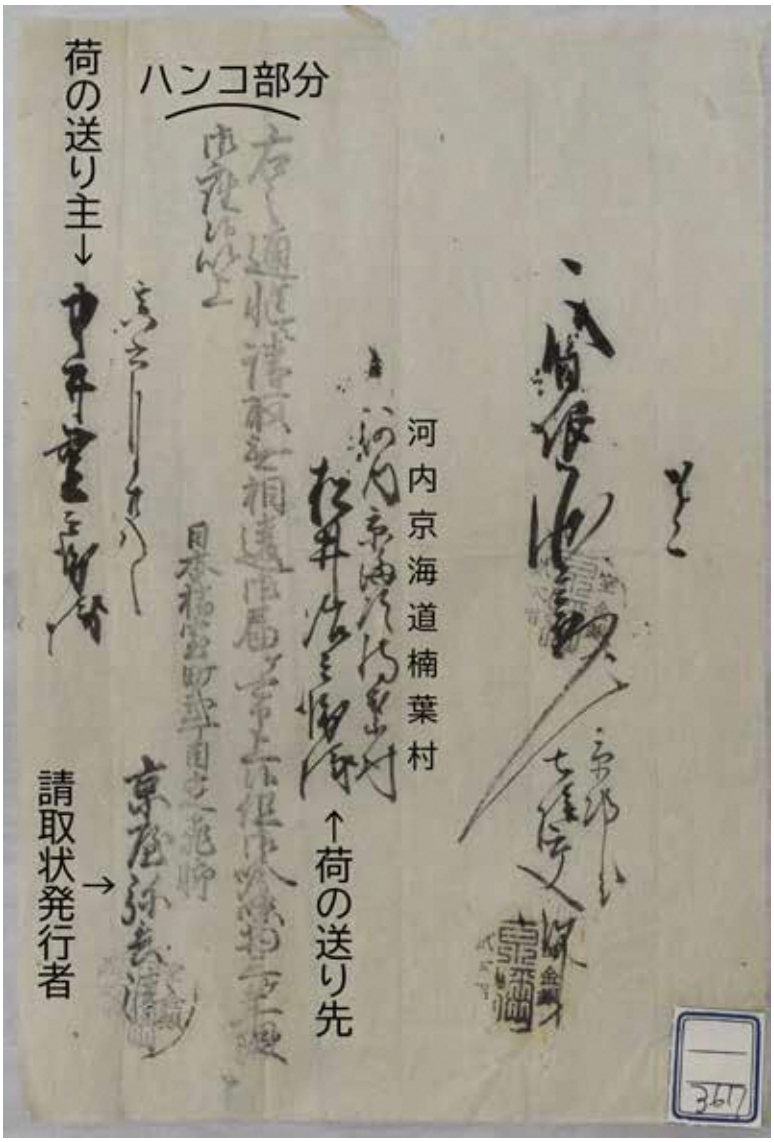
ちょっと気になる文化財！

市内の文化財にまつわる小ネタをご紹介

古文書
飛脚請取状

掲げた写真は、楠葉村町組（町楠葉）の庄屋をつとめた米谷（よねたに）家に残された一通の古文書です。よく見ると、「右之通……」で始まる２行と、差出の名前とが、ハンコで押されたものとわかります。押された文言は、「たしかに受け取りましたので、間違いなくお届けいたします」といったもの。差出には「日本橋室町弐丁目定飛脚　京屋弥兵衛」とあります。これは、飛脚に荷物や手紙を預けたときの請取状、今でいう宅配便の送り状控にあたるものです。荷の送り主は、左端に書かれた「中井重兵衛」、送り先は中央に書かれた「河内京海道楠葉村 松井治兵衛」です。ようするに中井重兵衛が、江戸・日本橋室町の京屋弥兵衛の店から、手紙などを楠葉村へ送ったときのものです。多くの荷物・手紙を預かる京屋では、あらかじめ文言・差出をハンコで押した用紙を大量に用意しており、荷の受付時に必要事項のみ記し、「京弥」の印鑑を押して請取状を発行していたことがわかります。

送り主が中井重兵衛であることも注目されます。中井重兵衛とは、江戸・本芝（ほんしば）（東京都港区芝）に店を構える両替商・大坂屋重兵衛であると考えられるからです。大坂屋重兵衛家は、延宝３年（1675）以前に、楠葉村から江戸へ移住した中井重兵衛正秀が開業した両替商です。以後、代々「大坂屋重兵衛」「中井重兵衛」を名乗って幕末まで続きました。この飛脚請取状がいつのものか、正確にはわかりません。ですが、大坂屋が出身地楠葉村と関係を持ち続けていたことを、この請取状は示しています。



飛脚請取状「米谷家文書（その１）」367号

民俗

煉瓦型枠

右の写真の木枠は、煉瓦（れんが）をつくる際に用いた型枠です。内側の空間は、25.5 × 12.4 × 6.4 ㎝の大きさで、ここに粘土を詰めて成形しました。枠の外側には「東京型」の墨書があります。現在日本で多く使われているJIS規格の煉瓦は、大正14年（1925）に大きさが定められましたが、「東京型」は、それ以前からあった煉瓦の規格のひとつです。

日本での煉瓦製造は、幕末から明治初頭にかけて、製鉄所の炉材に用いる耐火煉瓦や、軍需工場や官営工場の建材の赤煉瓦としてはじまります。明治期には火災に強い煉瓦造の建物が都市を中心に増加し、洋風化の象徴になったのです。「東京型」はこうした煉瓦隆盛の時に多く使われた規格なのです。

現在の煉瓦工場では、機械で押し出した粘土をピアノ線で切って成形しているのですが、この型枠の使い方について、昭和16年創業の山陽煉瓦株式会社（広島県竹原市）にお話を伺いました。それによると、まず枠の内側に、詰めた粘土がはずれやすいように砂をつける。次に型枠を台の上に置いて粘土を詰め、はみ出した粘土は木の棒ですり切る。枠を持ち上げると、煉瓦の形になった粘土がすっと抜ける。その後乾燥・焼成して完成ということでした。

なお、東京型の煉瓦の大きさは22.7 × 11 × 6 ㎝と、この型枠よりおよそ1割小さいのですが、それは粘土が乾燥、焼成の度に収縮するためです。収縮率は粘土によって異なるため、新たに煉瓦を焼くときは、試しに標準的な型枠に詰めて焼いてから、その粘土にあった型枠をつくったのだそうです。

煉瓦を専門に製造する企業は大正になって増加しますが、それ以前は地域の瓦屋が煉瓦も製造していたようです。枚方市域や周辺地域には、古くから瓦を製造する瓦師が存在します。この煉瓦の型枠は、代々農業を営んだ高田（こうだ）の旧家で発見されたものですが、同家で瓦を製造したことはなく、この型枠についてもまったくわからないとのことでした。

残念ながら、この型枠でつくられた煉瓦は、どこでどう使われたのかわからないのですが、近代化を支えた道具のひとつです。

この煉瓦の型枠は、後日、所蔵者より民俗文化財として枚方市に寄贈され、枚方市立旧田中家鋳物民俗資料館で開催中のちょこっと展「ひらかた☆わくわく展」で、4月10日まで展示しています。

考古

「西」の刻印をもった瓦

九頭神廃寺は牧野本町にあった古代寺院跡です。前身となる寺院は７世紀中頃に遡り、７世紀後半から８世紀前半にかけて大規模に整備されました。現在までに300次を越える発掘調査が行われ、大量の瓦が出土しています。その中には「西寺」、「西浄」、「西」と刻印された瓦もあります。これらの瓦はどのような意味があるでしょうか？

九頭神廃寺と同じ「西」の字の刻印を持つ瓦が多く出土する古代寺院が、遠く離れた京都にあります。平安京にあった西寺です。平安京の正面に羅城門を挟んで東寺と対にして、８世紀末に創建された官寺です。西寺跡ではこのほかに「西年」、「西廣」、「西土」、「為」、「土（土の異体字）」などと刻印された瓦が多数出土しています。このことから刻印された「西寺」は西寺のことを指し、ほかの刻印の「西」の文字も西寺のことを表していると考えられます。九頭神廃寺からは、この「西」の文字の刻印を持つ瓦のほかにも西寺跡と同じ型で作られた軒平瓦も出土しており、これらのことから九頭神廃寺は９世紀初頭に大規模に補修され、その瓦は西寺に供給するための瓦の一部が使用されていたと考えられます。

枚方市内には、このほかにも「西」の文字の刻印を持つ瓦が出土する遺跡があります。牧野阪瓦窯跡です。九頭神廃寺から北西約600ｍの牧野公園付近にあたります。公園の造成工事の際に「西」や「土」といった西寺と同じ刻印の瓦が見つかっています。九頭神廃寺と牧野阪瓦窯跡、そして京都の西寺跡とを結びつける面白い資料です。

1:「西寺」九頭神廃寺

2:「西浄」九頭神廃寺

3:「西」九頭神廃寺

4:「土」牧野阪瓦窯跡

5:「西寺」西寺跡

6:「西浄」西寺跡

7:「西」牧野阪瓦窯跡

8:「土」西寺跡

刻印瓦（縮尺不同） 5,6,8は『昭和61年度京都市 埋蔵文化財調査概要』から引用

お知らせ

新型コロナウイルスにより中止・変更の可能性があります。詳細は『広報ひらかた』などをご覧ください

	イベント名	開催日
輝きプラザきららで開催します		
①	パネル展「特別史跡百済寺跡」	4/1（金）～6/15（水）
旧田中家鋳物民俗資料館で開催します		
②	ちょこっと展 「木のいれもの～おけとたる～」 土間トークは5/15（日）·6/18（土）	4/23（土）～7/10（日）
③	寺子屋講座（全４回） 「枚方鋳物師田中家の古文書を読む」	5/20·27、6/3·10（金）
④	彫金講座「シルバーリングづくり」	5/28（土）
⑤	簡易鋳造講座「ぐい呑みづくり」	6/11（土）
⑥	彫金講座「連続講座」（全５回）	6/18·25、7/2·9·16（土）
⑦	七宝講座	6/24（金）
中央図書館で開催します		
⑧	古文書入門講座（全５回）	6/6·13·20·27、7/4（月）

旧田中家鋳物民俗資料館主催

◆七宝講座「干支の正月飾り」
1/20（木）10人
干支から選んで、干支の飾りを七宝でつくりました。筆や串などを使って、ガラスの粉の釉薬で干支を描きました。

◆彫金講座「アルミ皿づくり」
1/29（土）４人
アルミ板を金槌で叩いて、皆さん好みの形の菓子皿を楽しみながらつくりました。

◆寺子屋講座　R3.12/25（土）５人
「わらに親しむ～しめ縄づくり～」
稲わらでお正月のしめ縄をつくりました。わらと格闘しつつ、上手にしめ縄をつくりあげていました。

◆寺子屋講座　1/5（水）11人
「とら年タイガー！ずぼんぼづくり」
干支でもある虎のずぼんぼづくりをしました。うちわであおぐと動く紙のおもちゃで子どもも大人も楽しんでいました。

事業報告

◆市内歴史ウォーク
「歩いてみよう！枚方寺内と枚方宿」
R3.12/7（火）14人
あいにくの雨でしたが、枚方寺内から枚方宿まで歴史を学びながら歩きました。

総合文化芸術センターで開催しました

◆市民歴史講座　2/9（水）82人
「継体大王をとりまく女性たち」
継体大王の母・祖母などの出身勢力からとらえた姿に視点を置いた講演が好評を得ました。

編集後記

3月10日東京大空襲…77年前の夜間空襲で死者数10万人以上。焦土と化した東京の写真を見るたび心が痛む▲3月11日東日本大震災…11年前の14時46分に発生した災害の死者・行方不明者は18423人▲亡くなられた方と御遺族の皆様に哀悼の意を表し、黙祷を捧げた▲3月12日東大寺御松明…人々の安寧を願う